

篠山養護学校の地域における機能

～地域における養護学校と障害児学級の関係～

中野佳代子

(兵庫県篠山市立八上小学校)

1. はじめに

篠山養護学校は、兵庫県の中東部山間地域の篠山市(人口47,000人)に位置し、市内で唯一の養護学校として幼稚部から高等部までの一貫教育を行っている。「こころ豊かにたくましく生きる力を育てる」を教育目標に一人一人の障害状況にあわせた教育活動を展開している。幼児・児童・生徒数は36名(医療的ケアが常時必要な子どもー3名)で、教職員数50名で1名の看護婦が配置されている。

篠山市内の小学校19校のうち12校に、中学校5校のうち4校に障害児学級が設置されている。自分の子どもを地域の小中学校へ通わせたいという願いは強く、障害児学級が毎年増え続けている。ほとんどの学校は、1学級だけの障害児学級で、担当教員も1名だけであるため障害児教育に取り組む上で相談できる相手は学校内には少ない。また、市内には就学前の子が通う療育園はない。

私は、平成9年度から平成11年度までの3年間を篠山

養護学校で勤務し、平成12年度から平成13年度まで篠山市立古市小学校に勤務した。古市小学校は、児童数150名(幼稚園22名)教職員13名で、「こころ豊かにたくましく」の教育目標達成に向け実践を重ねている。平成12年度には初めて障害児学級(知的障害)が1名で設置された。私が今までに経験してきたことを生かして、養護学校とも連携して取り組んでいる。

このような状況の中で、養護学校の地域での機能や役割、特に障害児学級との関係について考えてみた。

2. 篠山養護学校の機能と連携して

養護学校の中では、一人一人の障害状況に合わせて根気強い教育活動が進められている。幼稚部から高等部までの子ども達の教育を考え合わせた時、関係諸機関との連携や交流によって、その活動は一層深められていく。(図1)

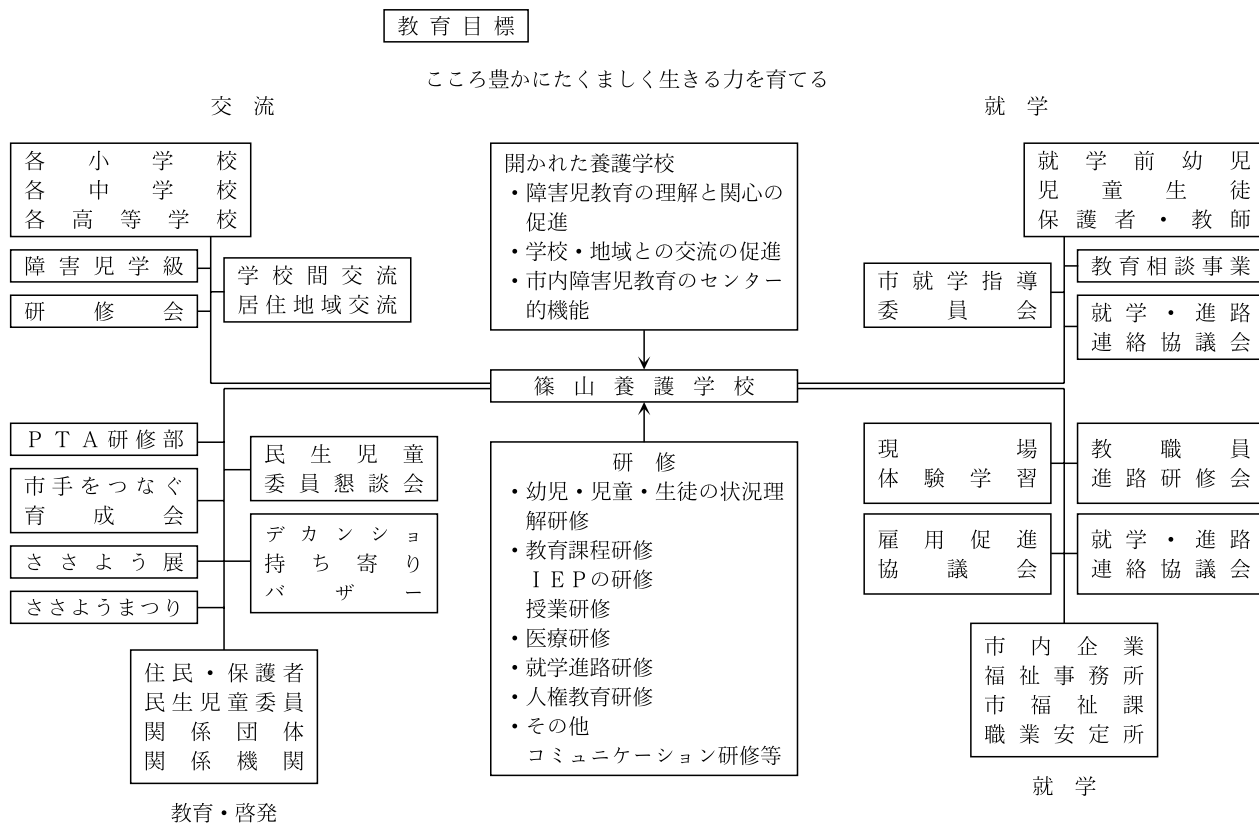


図1

① 市内障害児学級との連携

図1では、篠山養護学校の交流・教育と啓発・就学・就労でどう連携をして進めているかという全体図である。

この中で、古市小学校に障害児学級（ひまわり学級）が設置されたことで養護学校とどのような連携をしてきたのかを具体的に述べてみる。市内には、篠山市小学校教育研究会（篠小研）という組織があって、月1回自分の研究したい部会に入って、授業研究や話題提供をして研究を深めていっている。その中の「発達・心理部会」では特別に支援が必要な子どもへどう関わっていくか協議したり、講演を聞いたりしている。ここは障害児学級担当のほとんどと不登校やいじめ問題を研究したい教師が集まっている。会場が養護学校のため部会の内容以外にも学ぶことは多い。とにかく、養護学校に足を運んでいくよう計画を立てていくことが必要である。

市内全体の障害児教育に関して検討していくのは、篠小研障害児教育担当者部会である。障害児学級設置校とそうでない学校の課題がちがっていて難しいところがある。しかし、障害も多様化し、この部会での内容を整理して、活性化させなければならないと思う。

さらに、小学校の障害児学級担任が集まって夏と秋の交流会を進めたり、教育活動の発表の内容検討等を中心に行っている。その中で日常の悩みを出し合ったり、取り組みを交流したりするよい場所となっている。また、中学校でも担任と生徒がゲームや食事をしたり、担任が施設見学を行ったりしている。障害児学級の担任が小学校・中学校それぞれに会を持つことも必要ではあるが、むしろ進路などを考えたときには、もっと連携していく必要があるということから篠山市障害児育研究協議会を設立するため、小中学校で検討し、平成14年度からスタートすることになっている。

この他、本校からも1～2回の教育相談（就学時教育相談・視覚について相談）に参加したり、研修会には養護学校から講師として来ていただいたり、養護学校の研修会に参加したりしている。研修内容が必要としていることではないことであったり、小学校の中での教育活動が多忙なため、ほとんど参加できないのが現状である。しかし、養護学校がどのような内容で研修されているのか知ることが大切である。

また、養護学校の各学部からみた交流や連携は（表1）のとおりである。養護学校を中心にして、障害児学級担任どうしの連携も強くなり、自主的に研修を深めている教員も増えてきた。

② 養護学校で学んだことを小学校に

平成13年度、古市小学校の障害児学級には2名（Aさん－3年生女子、Bさん－1年生男子）の児童が在籍した。障害児学級担任も2年目になり、2名の子ども達と一生懸命に教育活動に取り組んでいる。平成12年度には1名で設置され、担任も初めてだったので障害状況の把握と教育課程、学級の運営などについて相談しながら進めてきた。

平成11年度に私が養護学校に勤務している時から、古市小学校では障害児学級の設置に向けて教職員や保護者にどのような学習を組織していけばよいのか等、相談に乗りながら進めてきた。養護学校の保護者が古市小学校・幼稚園PTAで講演をされることになり「わが子の障害を受け入れ、認めること」や子育ての苦労や親の思いを話して下さり、障害児教育への学びがスタートした。私が古市小学校に勤務する1年前から、このような関わりの中で進めていたので、実際に勤務することになってよく理解できた上で進めることができた。

平成12年度の1年間は、詳しく障害状況を把握するため、私が検査を実施し分析と具体的取り組みについては養護学校で相談をして、どのような教具や教材を使って指導していくのか等のアドバイスをもらって進めてきた。その間、基本的な生活習慣の定着や指先の動き、階段の昇降時の動き等、具体的にどう進めて行くかよく話込んだ。担任も理解し、困った時に相談する程度で、大きな行事や節目の時に委員会で話をしただけで、自分で考えながら進めて行った。

また、幼稚園（管理職は兼務）に多動傾向の子がいて、どのように保育していくのがよいか相談されて、幼稚園担任とも随分と話をした。また、私も小学校の授業の合間を縫って様子を見に行ったり。そして、保護者の思いを聞きながら、教育相談にも行き、小学校も見学する中で進路を1年生の時から障害児学級に入ることにスムーズに決まった。

やはり、この2名の子どもを理解する時や就学指導に関わっての進め方や指導法など、養護学校や自分の障害児学

表1

幼稚園部	小学部	中学部	高等部	全般
市内「幼児のうたまつり」運動会練習から当日まで参加	居住地校（月1回～週1回）運動会練習から当日まで参加・隣接校対面式	居住地校（体育祭練習から当日まで参加）音弁大会参加	H高校のクラブが週2回本校課外活動に参加 S高校の「花いっぱい運動」に参加	小・中学校は市内障害児学級と交流会 商工会と「ふれあいクリーン作戦」

級での経験が生かせたと思っている。

平成13年度は、在籍が2名になり、一人一人に応じた教育内容を創ること、二人がお互いの力を合わせて創り上げる内容をうまく組み合わせる必要が出てきた。1年生のBさんを小学校のリズムに慣れていくように関わっていると3年生のAさんが嫉妬することもあったが、新しい学年のリズムが定着すると二人が互いに伸びようと姉と弟のように努力し始めた。運動会や学習発表会などでもみんなの中に入り、全体の一人として頑張ることができた。自分のペースに合わせた学習で二人とも自信がつき、できることを精一杯がんばる姿が出てきて生き生きと取り組んでいる。

ところが、交流学級の中では自分の居場所はあっても、障害児学級で自分のペースで学習に取り組む楽しさを感じてきていた。学年が進むにつれて交流学級の中で活躍する場が少なく、クラスの友だちとの関係も学級担任のもっていき方で微妙に変わってくる。障害児学級での取り組みで頑張る身につけたことが、クラスの友だちの中で発揮でき理解されるように進めていきたい。そして、交流学級の中でどんな力を互いにつけていくのかをもっと明確にしていかなければならないと思っている。

養護学校から小中学校へ配置換になった教員は、校種が変わったということで、たいへんな努力をしなければならない。特に、養護学校での経験が豊かな教員ほど苦しい思いをしていることが多い。今までと違った教育課程で多くの人数の子ども達を相手にしなければならない。厳しさと優しさを時と場合によって使い分け、教員のペースではなく常に子どもの思いやペースを受けとめながら進めなくてはならない。

養護学校で学んだ専門的な内容を小中学校で発揮するだけでなく、子どもたちの小さな変化に目を向けて学級経営に取り組みたい。小中学校の組織の一員として生き生きと教育活動をしなければ養護学校に勤務したことまでもが評価されなくなってしまう。毎日の教育活動だけに忙しく過ごしているのは、養護学校で学んだことは、十分に発揮できないのではないだろうか。

③ 養護学校の子と障害児学級の子と交流学級の子と

養護学校の子どもが交流に出かける時は、事前に打ち合わせや準備をして行く。交流先では、一日のスケジュールが決まっている中で関わることになっていて、とても大切に扱ってもらえることが多い。交流は計画していたように進むことが多く、楽しいうちに終わる。ただ、子どもも回数を重ねれば慣れてクラスの雰囲気なども伝わってくるが、最初のうちは担任も子どもも気分的に疲れる。

障害児学級の子ども達は、交流学級でも共に生活をし、学習するため、分かり合ってはいても、いろいろなトラブ

ルや行き違いも起きてくる。その度に、互いの気持ちを考えたりしながら振り返っている。クラスみんなで喜ぶこともあれば、悲しんだり、怒ったりし、その繰り返しの中で成長していくと感じる。

しかしながら、障害児学級で根気強く取り組み、今までできなかったことができた時、クラスの子ども達はそれを喜んだり、受け入れたりして、自分も頑張ろうと思っている。反対に障害児学級の子が力をつけてくると、周りの子からたたかれる場合もある。いつも一緒に生活していると、クラスにAさんがいるからと努力しなくなっている一面も感じる。

それは、本校で障害児学級が設置されたとはいうものの、まだまだ今後にしなければならないことが多々あることを示している。障害児学級について一見理解を示している保護者も、特に関わりがあるほど差別的なものの考え方も残っている。私達は、具体的な事例を通しながら、相手を受け入れ、お互いに高まっていくように進めていかなければならないと考えている。

交流校で養護学校の子に対しては障害が重度であるということからか、お客さんの対応になっていることも多いし、障害児学級の子に対しては、話を直接にぶつけてくるといった対応になる。障害の状況に応じて対応しているのだが、この違いをひしひしと感じ、交流によって養護学校の子どもも障害児学級の子どもも、そして何よりも交流学級の子どもにどんな力がついているのか考えたいと思う。

3. 地域ぐるみで学ぼう

古市小学校の校区は、以前からこの地域で住んでおられる方が圧倒的に多い。転出入がほとんどなく、クラス替えもなく卒業して行くのが今までの状況であった。ところがここ数年、転出入が増え、家族が離れて生活するパターンが非常に多くなってきた。そして、校区の人達の学校を大切に思われる気持ちは強く、教育活動の取り組みにも強い関心を持たれ、協力的である。地域の住民のつながりも強くお互いを知り尽くしているといった状況であるが、異質なものを受け入れにくい体質があることも事実である。

校区の中には、それぞれの人権を大切にしていこうと考え学習を重ねている地域や障害のある人を受け入れて行く施設などもあり、地域ぐるみで活動されている地区がある。また、一方では高齢化が進み65歳以上の方が過半数以上を占めるといった集落もあり、様々である。

地域ぐるみの住民学習や、青少年健全育成連絡協議会といった地域ネットワークの組織の活動の中で、地域での昔からの考え方を改めていく学びが根気強く進められている。私も、人権教育推進員や青少協事務局として、地域に出かけて行って話をしたり、ふれあいコンサートの企画・運営

や学習会の推進などをしてきた。その中には「共に生きる」という視点で学習を進めることが多く、障害者や高齢者などの問題と共に、私は「子ども達の出来事」から人権を考えるようにしてきた。そして、子ども達にこのような考え方があるのは、まだまだ大人の中に根強い偏見があるということを確認し、共に学習していこうと毎年積み上げているのである。

4. 障害児教育の地域のセンターとして

篠山養護学校には、市内に唯一の養護学校として「障害児教育のセンター的な役割」を担ってほしい。施設・設備を活用し、一人一人に応じた教育内容や教育相談の機能を持ち、専門的知識や技術があって多くの人が障害児教育を通して養護学校に集まるようにしたい。そのためには、多くの研修を校内での研修に力を注ぎ、子どもの障害の状況と向き合って取り組みを重ねることである。

そういった意味で、今でも研究や教育相談などで養護学校へ行くことは多いが、養護学校の行事などに参加する人数が減少傾向にある。養護学校の取り組みの中で「発信すること」にもっと力を入れてほしい。市内のそれぞれの地域には、養護学校があることも知らなかったり、どんな教育活動を展開しているのかも知らない人がある。養護学校から「何を」「どのように」発信するのかを考えなければならない。特に、市内の小中学校と一緒にの会の中でも、発信する努力が必要になってくる。これまでも、養護学校

はユニークな取り組みをしているけれど、よく考えて活動していると感じたものである。校種がちがう中で発言することはエネルギーが必要であるが、積み重ねてほしい。養護学校にいて、目の前に子に専門的に関わっていくことに力が入るが、教育全体の大きな流れも共に大切にしていく教師であり続けたい。

そうやっていくには、学校経営や運営の理念を具体化して教職員に浸透させていくことが重要である。障害児教育のセンター校として教職員の意識を高めていくことが問われているように思う。

5. 終わりに

初めて設置された障害児学級をどう運営していくかを、養護学校で学び体験してきたからこそ古市小学校でいくつかの工夫をすることができたと思う。しかしながら、まだまだ養護学校の中でどのような教育が行われているか知らない人もあるだろう。そのためにも、地域との結びつきを大切に、養護学校から発信することによって理解を広げ、深めていきたい。

平成14年4月に篠山市障害者総合支援センター「スマイルささやま」が完成し、高等部の卒業生が受け入れてもらう。このセンターとの連携も一つの契機にして、養護学校の教育にも振り返りながら進めていきたい。

様々な取り組みが相まった時、開かれた養護学校となり、センターとして機能していくのではないだろうか。